

【質問】

①重度知的障害の小学生の保護者です。自閉症高校生男子の保護者でもありません。自己肯定感がなかなか上がってきません。自身の特性苦手なことについて理解しているようでして、遅刻忘れ物、成績の低迷、疲弊、同じことを繰り返して、成功体験につながらないことの繰り返しです。それでも、自己肯定感、自己効力感をアプローチし続けたいのですが、年齢もあり親からの関わりは反発してしまいます。親のアプローチ下手は自覚していますが、高校生男子思春期に自己理解のため、支えて行くためには何が一番大切だとお考えですか？

【西村先生からの回答】

→成功体験といっても、なんでもさせれば成功するかといえば私たちにとってもそうではありません。言葉が苦手な子に言葉を積み重ねたら理解できるようになるかといえば、そうとは限りません。本人ができていること、苦手なこと、そして不十分だけでもできる可能性のあること、を見立てて、あと少しでできそうなことに対して、手立てを講じてできる体験をさせていくことが必要と思います。本人が何に気づいているのか、何が理解できているのかに着目して、それを手立てにしていきます（例：視覚化、焦点化、刺激の統制、数量の調整…）。

できる機会を増やしていくためには、本人を変えるというより、環境を変えてわかりやすくしてあげることが欠かせません。

失敗経験を忘れようとしてもなかなか忘れられない特性を持っている自閉症の子供は少なくないので、成功体験で上書きをしてあげる必要があります。

【質問】

②なぜ、発達支援が必要な人が増えていると思いますか？何か社会的な意味があるのでしょうか？

【西村先生からの回答】

→私たち日本だけでなく世界中で社会構造がどんどん変化していています。たとえば産業の分野で考えてみると第一次産業が主流の時は、農業、林業、漁業、鉱業といった自然が相手の仕事が主流でした。必要なスキルは忍耐力、地道な作業、体を使うこと等になります。そうすると働きづらさを感じる人として、身体が不自由な方が考えられます。

現在はサービス業や卸売り小売業、医療、福祉といった人が相手の仕事が主流です。そうになると高度なコミュニケーション力、臨機応変な対応が求められます。

適切に人と関わるのが苦手な方の中には、精神や発達障害のある人たちが考えられます。

このように人と環境の相互作用によって、生きづらさの顕在化につながっているとみてもよいかもしれません。